

エイカン・デュ・マルティノー著
有田忠郎訳

『生ける潮の水先案内人』

ヘルメス叢書第四巻は、ラムスプリングの『賢者の石について』*Traité de la pierre philosophale*, 1539 及びエイカン・デュ・マルティノーの『生ける潮の水先案内人』*Le pilote de l'onde vive*, 1678 を収める。

本叢書はすでに四冊が出版され、六人の著者による九種の著作に容易に接することができるようになったことになる。これらの著作が、いずれも一七世紀に出版されたか、あるいは改めて版をおこされていることに注意をしたい。未だに「愚昧」な錬金術と、「暗黒」の中世を観念的に連合させているものには、このことはあるいは意外かもしれない。しかし近代が胎動していた時期にも錬金術—ヘルメス哲学はじゅうぶんに命脈を保っていた。むしろ一七世紀には、錬金術関係の書物の著しい出版ラッシュをさえ指摘することができるのである。たとえば英国では、一六五〇年代だけで、それ以

前に出版されたものとはほぼ同数の点数の錬金術書が出版されている。大陸においても事情はそれほど変わらないだろう。

ボルドー生まれの自然哲学者マルティノーが一六七八年に著した『水先案内人』は錬金術書とはいいがたいかもしれない。十一の章と同数の対話、及び寓話風に語られるインドへの短路航海譚から成るこの書物は、著者の特異なコスモロジーと、それに基づく潮汐現象の理由の説明をこころみるものである。著者は地球の中心に「元素的な火」と結びつけられた一個の球体と、「これをめぐって回転する十二個の球体」を想定する。星辰の発する「影響力」は、回転する球体群の「息吹と運動」によって中心の球体に及ぼされ、強い反撥力をもつ「中心点」によって再度球体群にまではね返される。それは回転する球体群の息吹によって地表へ逆上昇され、海中を通じて大気圏に達し、自然界の諸現象の原因となる。海水を昇降させる力を有するのは、この球体群の「運動と息吹」に他ならない。この宇宙観が著者に独自なものかどうかよく断

定しえないが、訳者解説にもあるように、海水の七つの上昇・下降運動が各惑星（それぞれが金属と対応する）に支配され、順次階程を逐うことを説くくだりは錬金術的な思弁によるものと思われる。同じ場所を用いられる卵の孵化の比喩は、術師の金属変成の作業の比喩として一層ふさわしいことは、その方面に昏い紹介者にも指摘することができる。おそらくこの卵の比喩は、潮汐現象と金属の変成という、あい隔った現象の距離を近づけ同一の原理を適用するさいの心理的な鍵となっている。錬金術が実験室における技術にとどまらないことはいうまでもないが、奇妙ではあるが壮大なコスモロジーを有し、さらにそれに基づいて気象や潮汐の現象を説明する地球物理学までを育んでいたことはやはり驚きであった。そして、本書の刊行の八年後に、ハレーが風を「太陽の照射が一定でないために起る対流」と定義し、その翌年にはニュートンが『プリンキピア』を上梓して、潮汐現象の原因が太陽と月の重力であることを明らかにしたことを思うと、近代科学の宇

宙観がとって代わったものが中世以来の「単一の」宇宙観であることはきわめて疑わしいとせねばならない。ニュートンが「最後の錬金術師」であったことはさておくとしても。

(四六判 二六五頁 一九七七年二月 白水社「ヘルメス叢書」4 二二〇〇円)
川島昭夫 京都大学大学院生

ジュール・ミシュレ著
大野一郎訳

『民衆』

ミシュレ(一七九八—一八七四)は『フランス革命史』のなかで、「この歴史にはひとりの英雄しかいない。すなわち、民衆である。」と述べているが、本書が上梓された一八四六年は、『フランス革命史』執筆の前年にあたり、民衆史家ミシュレ生誕の重要なエポックをなす時期である。

本書を貫く歴史観の特色は、民衆不在の歴史への反省・民衆史の復権にとどまらず、より積極的に、民衆を歴史の表舞台に主役として登場させたことにある。そして、その役回しは、「民衆の子として私は民衆と

共に生きてきた。私は民衆を知っている。それは私自身なのだ。」(本書一五七頁)と自負するミシュレ本人においては誰もいない。以下、本書の要点を述べる。

ミシュレは、十九世紀中葉のフランス社会を分析し、次のように慷慨している。「フランスが刻々と下り坂になり、アトランティスのように沈んでゆくのが見えるのではないか!」(三一頁)このようなフランスの凋落の根本原因は「機械主義」(『機械万能』)である。イギリス流に、政治・経済構造の近代的転換を図る過程で、フランス社会には何と精神の荒廃と人間不在が進行していることだろう。「機械主義の支配するところにあるのは祖国を欠いた国家である。技術や芸術を欠いた産業や文学である。検討を欠いた哲学である。人間を欠いた人類なのである。」(一四一頁)という痛烈な機械文明批判は、現代社会にも連なる人間疎外の問題を投げかけている。ミシュレによれば、この窮状を打開する道は、忘却のかたにある民衆の復権においてはありえない。「民衆においても、地質学にお

けるのとまったく同様、熱は下の方にある。降りていきたまえ。熱が増大するのが見られるだろう。低い層において熱は燃え上がっている。」(一三四頁)冷酷な近代社会にあっても、下方では、地熱に喩えられる民衆の生活のヴィヴィッドな息吹きが感じられるのである。

それでは、一体、民衆とは何か。ミシュレは、民衆の属性について多くの言辞を費している。民衆とは、本能と行動の人であり、素朴で無垢な人であり、子供のような心の持主である。「子供は民衆を通訳する。」(一七二頁)とりわけ、「農民はフランスと合法的な婚姻で結ばれた。」(一三五頁)という表現から、中世以来の典型的農民「善人ジャック」を民衆の代表とみなすことができる。

しかし、ミシュレの民衆像はきわめて曖昧である。彼は基本的に、当時の社会をブルジョアと民衆の二大階級対立と捉えながら、一方では商工業者やブルジョアを民衆と同列視しているのである。すなわち、『ブルジョワジーが民衆より出て、その活